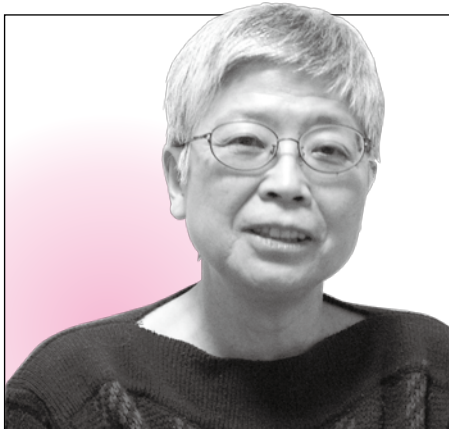


特集 女性と子どもからみる貧困問題

注目を集めている格差や貧困の問題。男性が“家族を養えない”ようになり、社会的に大きく取り上げられるようになりましたが、女性や子どもはこの問題が注目されるずっと以前から格差や貧困にさらされ続けてきたのです。今号は、女性や子どもの課題にコツコツと粘り強く続けられている取組みから、私たちがこの問題に取り組むヒントを考えます。



シングルマザーを追いつめる 経済的・文化的貧困

なかの ふゆみ
中野 冬美さん

NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・関西事務局長

就労の困難から始まる母子家庭のしんどさ

ひとり親家庭はさまざまな困難に直面していますが、なかでも母子家庭における最大の困難は「就労」です。原因はいくつか挙げられます。まず、結婚した女性の多くは仕事をやめるか、パートなどの非正規の仕事をしています。家事や育児といった「家庭責任」を果たすためです。つまり自立するには非常に不安定な状況にあるわけです。さらに、日本では子どもを連れた女性が安定した収入を得られる仕事に就くのはほとんど不可能です。仕事が見つかって低賃金で労働条件が悪いのが「普通」なので、定着しにくい。けれども転職を繰り返すほど条件はさらに悪くなるので、どんどんしんどくなっていくという状況です。その背景には、男女の賃金格差が非常に大きいことや、「女性の仕事は安く使い捨てていい」という社会的な通念があります。

補助労働として扱われてきた女性の仕事

ここ数年、ないものとされてきた「貧困」に光が当てられたのはよかったと思います。しかし「こんな賃金では男性が家族を養えないじゃないか」という問題意識では、シングルマザーの困難は置き去りにされたままになってしまいます。パートを2つ3つとかけもちして長時間働いても、日々暮らしていくのが精一杯。それはもう本人の責任ではなく、この社会の労働のあり方そのものに問題があるのではないのでしょうか。

また、ホームレス状態になることを究極の貧困と表現されることがありますが、「究極の貧困」の形はひとつではないと考えています。たとえば、離婚原因のトップは「性格の不一致」で、次が「暴力」とされて

いるのですが、多くのシングルマザーたちの相談を受けていると、罵詈雑言を浴びせたり無視したり、妻の言動をことごとくバカにするといった精神的暴力が多くみられます。しかしそれを女性自身も暴力と認識できていません。こうしたことから、私は「性格の不一致」にもかなり暴力が含まれているのではないかととらえています。そして、暴力もまた貧困のひとつの形（関係性における貧困）だと思うのです。

差別的なまなざしを背景にした文化的貧困

多くの母子家庭が経済的に困窮しているのは事実ですが、「貧困」とは経済的な問題だけではありません。「両親と子どもとがともに暮らしてこそ温かい家庭である」という考え方が根強い社会で、そうではない家庭に育つ子どもには最初から厳しいまなざしが注がれます。また、友だちと遊ぶにも読書やキャンプなどを楽しむにもお金がかかる世の中で、経済的な余裕がない母子家庭は、進学だけでなく友人関係やさまざまな経験をする機会からも疎外されます。文化的なものがすべて「あるべき家庭」を中心に動く社会において、マイナスの状態からスタートせざるを得ない母子家庭の子どもたちが自尊心をもって育つのはとても困難です。経済的な貧困と差別的なまなざしを背景にした文化的な貧困が母子家庭を追いつめているのです。

NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・関西
TEL/FAX:06-6634-7336
E-mail smfkansai@orange.zero.jp

施設を出た子どもたちを 孤立させてはならない

ふじ かわ すみ よ
藤川 澄代さん

社会福祉法人大阪児童福祉事業協会アフターケア事業部部长



社会に向かって元気いっぱい飛び出してほしい

私たちアフターケア事業部では、児童福祉施設などを出た子どもたちの生活相談や自立支援を行なっています。通信「そらまめ〜」を年3回発行し、事務所内にはテレビやパソコンを設置したフリールームを併設しています。また、初就職お祝い会や職場定着表彰などの行事もあります。

さらに、施設を退所後に就職したものの辞めてしまい、次の就職先が決まらない、少年院を出たあとの帰住先がないなどのさまざまな事情で住む場所がない子どもたちがいます。そうした子どもたちに生活の場を提供し、自立に向けて準備ができる場として自立援助ホーム「そらまめ」も運営しています。ホームそらまめの子ども達は、共同生活を通じて社会人としてのルールを学んで、自立にむけての準備をしています。

通信や自立援助ホームの名前が「そらまめ」なのは理由があります。そら豆は丈夫なさやとふわふわの綿に包まれて育ちます。そして豆のなかで唯一、空に向かって実るそうです。施設で守られながら育った子どもたちが自立する時には、太陽に向かって元気に飛び出してほしい。そんな願いをこめているのです。

社会経験の乏しさが自信喪失や孤立につながる

実は、施設のなかで育った子どもは「かわいそう」という印象をもたれる方が結構います。実際には子どもたちはとても大切にされて育ちます。一般家庭では景気によって生活が左右されることがありますが、施設では生活の心配をすることなく、楽しい行事もたくさん用意されています。施設入所前にはつらい経験をした子どもたちもいますので、施設に入って大切に育てられることは自尊心を高める意味でも重要です。その

一方で、社会に出ればどんな環境に育ったかは関係なく、社会人としてのマナーやふるまいを求められます。ところが施設で育った子どもたちは、日常の買い物や冠婚葬祭などの人づきあいの経験がどうしても乏しくなります。そのため、社会人生活が始まったとたん、わからないことがたくさん出てきて、とまどったり傷ついたりします。お葬式に紅白の水引がついた袋を持っていき、恥ずかしい思いをして会社に行けなくなった子がいます。似たような話はたくさんあります。

そこで施設を出る前の子どもたちへの支援プログラムとして、自立生活技術講習会をおこなっています。健康管理や食生活、お金のやりくり、ビジネスマナーなど日常生活に必要な知識を実習を交えながら学びます。好評で、2008年度から厚生労働省のモデル事業となりましたが、私が講習会を通じて大切にしたいと考えているのは、子どもたちとのつながりをつくることです。時には厳しく叱りながら、また、一緒に昼食を食べ、片付けを手伝ってもらい、フリールームでお茶を飲みながらおしゃべりをする。そのなかで私共の職員と子どもたちと仲良くなり、施設を出てからも気軽に立ち寄れる存在でありたいと考えています。

虐待や貧困などだけでなく、他にもさまざまな事情で親と離れ、施設で育った子どもたちが15歳や18歳で独り立ちするにはいろいろな困難があります。「上から目線」ではなく、しかし教えるべきことはしっかりと教えながら成長を見守っていくことが求められています。

アフターケア事業部

TEL:06-6765-3400/FAX:06-6765-3402

E-mail info@soramamail.or.jp



貧困や格差問題の解決は、収入があがって生活が安定すればそこで終わりではないようです。この社会が抱える構造的な問題—女性や子どもといった“力の弱いとされる集団”を対等に扱わず、尊重しない社会の姿が浮かんできました。誰もが個人として尊重され、平等に扱われて、生き生きと暮らしていける社会をつくっていく大切さを考えました。